主日の福音 18/06/17(No.949)

年間第 11 主日 (マルコ 4:26-34)

神がまかれた種が出発点なら

ミサの中で説教の時間は、ミサが長くなったり短くなったりするのに最も影響する要素です。思い込みかもしれませんが、大司教様が説教するミサと聞けば、長くなるかなぁと想像してしまうものです。以前お話ししたように今日私はミサのあとすぐに福岡に行くので、長い説教はしません。

今週の朗読で、二つのたとえが語られています。神の国を当時の人々により親しみをもって考えてもらえるように、「成長する種」のたとえと「からし種」のたとえに当てはめたのです。これらのたとえは、最終的には神の国が種まかれると、ひとりでに実を結ばせることを教えてくれます。人間の計算通りにではなく、知らないうちに、ひとりでに実をつけるのです。

植物の種がどんなに小さくても大きく実をつける。このように神の計画も初めはどんなに小さく見えても、必ず大きく実をつけるということです。私たちは献堂百周年の実りを見ましたが、始まりは献堂百周年の祈りを唱えたところからではなかったでしょうか。一回の祈りそのものは、それこそゴマ粒のような小さな取り組みでした。けれどもたくさんの人に感謝される実りとなりました。これからもたくさんの実をつけることでしょう。

これほどの大きな実りを喜び合えたカギは何でしょうか。私は、始まりとなった献堂百周年の祈りの中に、「実を結ばせたい」という神の思いが込められていたからだと思います。

祈りを作ったのは中田神父かもしれません。けれども中田神父の中には、ここまでの実りを予想はできませんでした。最初から、ここまでの実りを思い描くことができたのは、神お一人ではないでしょうか。

小さなものに過ぎなかった「献堂百周年の祈り」に、皆さんが空気を吹き入れてくださり、神が膨らませてくださったのです。どんなに練り上げられた計画も、必ず成功すると私たちは断言できませんが、出発点に神の思いが込められた働きは、鳥が巣を作るどころではない、すべての人が憩いを見出すほど大きな実りをもたらすのです。

そこで私たちが学ぶべきことはこうです。これからなそうとするその計画に、神の望みは込められていますか。その計画は神の望むことに向かっていますか。ここさえ間違いがなければ、人間の働きが不足していても、神がその計画を完成させてくださいます。

神が計画の出発点から立ち会っておられた出来事であれば、人間の協力がどんなにみすぼらしいものであっても、計り知れない実を結ぶのです。私たちはこの点を信じ、人にもそのように語れる者でありたいと思います。

洗礼者ヨハネの誕生(ルカ 1:57-66,80)